

## 湯檜曾川と谷川岳

宇敷 辰男

湯檜曾川ゆびそがわは群馬県の水上で利根川に流れ込む溪流である。夏の河原で裸足になって、その清流に浸かると暑さが引く。靴を履くと中まで冷えた素足でひんやり涼しくなる。平成十四年の夏、義父母と一緒に家族でここを訪れた。

湯檜曾川を清水街道に沿って遡って行くと、清水トンネルの入口に上越線土合駅がある。登山が趣味の義父は昭和五九年の秋にここから谷川岳ロープウェイで天神平へ昇り谷川岳に登ったそうだ。

谷川岳の尾根から西黒沢、マチガ沢、一ノ倉沢など幾つもの沢が湯檜曾川に向かって流れ落ちている。土合駅から谷川岳に登らず溪流に沿って歩いていくと、山道の壁面プレートに遭難者の氏名がいくつも刻まれていた。

一ノ倉沢に着くと落ちてくる水は背筋が寒くなる程ではないけれど、手が切れるように冷たかった。遠景の目の前に聳える一ノ倉岳の岩場は、雪溪から岩が天に向かって反り返るように垂直な壁をつくっていた。頂上を舞台に湧き立つ雲が舞い踊っている。標高差八百メートルを超す壮大で峻険な岩壁はロッククライミングの聖地である。緑の草木が岩にしがみつき、霧が岩場に渦巻いて、大空の雲の影が岩の壁面を駆け巡っていた。

刻々と変わる景色の中を、若人がロッククライムに向って歩いて行った。その姿を見ていた親子連れの父親が、垂直な岩壁の中に小さく人の姿が見えると指を差した。双眼鏡を覗くと、大きな岩壁に張り付いている二人のクライマーが見えた。

土合駅から湯檜曾川を渡った所に慰霊碑がある。帰りに立ち寄ってみると、上越線の開通した昭和六年から谷川岳遭難事故を記録した横長の銘板に、遭難者の名前が刻まれていた。昭和の登山ブームで事故が増え、特に一ノ倉沢の遭難者が多く、平成の終り迄に八百人を超え、ギネス世界記録になっているそうだ。慰霊碑には義父の同僚の息子さんの名もあり、女性の名前も刻まれていた。近年は年間数人だけだと慰霊碑にはこれから刻まれる人のための余白スペースも残されていた。